桑取谷の小正月行事

市川市　平井　光夫（上越市西山寺出身）

私の出身地を見ても、どこにあるかおわかりになる方は少ないでしょう。旧直江津市の西のはずれの桑取谷にある小さな集落ですが、十数年前に出来た「くわどり湯ったり村」に向かう途中にある集落と言えば、何となくどんなところかわかる方もいらっしゃるかもしれません。この桑取谷一帯では、毎年一月十五日前後に行われる、「鳥追い」や「サイノカミ」などの小正月行事が今も行われています。私も中学生くらいまでは小正月行事に参加した記憶がありますが、三十年以上前に高校卒業と同時に実家を離れたため、それ以来、小正月行事に参加したことはありませんでした。今年は一月十五、十六日が土日だったこともあり、急遽十四日の金曜日も休暇をとって、三十数年ぶりに故郷の小正月行事を体験してきました。五十歳を過ぎ、若いころより郷愁の念が強くなってきたことも理由かもしれません。ちょうど寒波の襲来で大雪となり道中大変でしたが、逆に小正月らしい雰囲気を味わうことが出来ました。

以下、その時の模様です。

まず、一月十四日の夜は、我が西山寺集落の「鳥追い」です。桑取谷の鳥追いは、子供達が鳥追い唄を唄いながら集落を回るというのが多いようですが、西山寺は集落を回らずに村のお宮の前で太鼓をたたき、それに合わせて子供達が鳥追い唄を唄います。夜八時頃にお宮に子供達と大人達が集まります。我々の時代は、子供は男だけだったと記憶していますが、今は子供の数が少ない影響か女の子も参加しています。集まるとまず宮司が祝詞をあげ、参加者が玉串を捧げます。そして夜の九時頃から十一時頃まで、一時間おきくらいに三回（一番鳥、二番鳥、三番鳥といいます）太鼓の音に合わせ鳥追い唄を唄います。

「こーりゃどこの鳥追いだ。カシラ切ってショ（塩）つけて、コンダワラへほうらいこんで（放りこんで）、佐渡島へ、席がないから鬼が島へ、ほーほー」

害鳥を駆除し、五穀豊穣を祈願する唄なんでしょうが、この害鳥とはもともと（江戸時代？）は、トキのことだったと聞きました。唄の合間には、子供たちはお菓子やジュース、大人たちはお神酒を飲んで語らいあいます。私が子供だった頃一緒にお菓子を食べた仲間が今は酒を飲み、その子供たちがお菓子を食べているというふうに世代は代わりましたが、鳥追い唄は当時と同じく唄い継がれており、子供たちが我々の時と同じように大きな声（小さな声では、「そんな声では鳥が逃げていかないぞ」と大人たちから怒られます）で唄っている姿は感慨深いものがありました。

翌一月十五日は西山寺集落から1㎞ほど離れた西横山集落の小正月行事の見物です。私にとって西横山は、母の実家がある集落なので、子供の頃から良く遊びに行った懐かしいところです。ここの一連の小正月行事は、桑取谷の中でもっとも多くの行事が伝えられ、写真家の故濱谷浩が昭和三十一年に「雪国」という写真集で紹介するなど民俗学的にも知られているようです。現在は集落の方々で「西横山小正月行事保存会」を結成し行事の保存と伝承を行っており、上越市の風俗慣習文化財にも指定されています。そのため、見物人も多く集まり、今年は九州の大学生なども来ていたようです。

西横山でも十四日の夜は、子供たちが鳥追いを行い、翌十五日は、まず早朝六時に「水浴び」が行われます。フンドシ姿の男衆が、桑取川に入って身を清めるというものです。川に入る前、村の神主さんがお祓いをし、神主さんに続いて十人ほどの男衆が厳寒の中、川に入って身を清めるというだけの厳かな行事です。しかし、早朝にもかかわらず、橋の上な

どからの見物人は三十人くらいいたでしょうか。あとで聞くと、村の男衆は神主さんだけで、他は地元で活動している「NPO法人かみえちこ山里ファン倶楽部」のスタッフなどとのことでした。

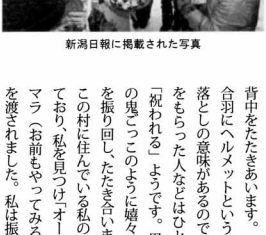
午後は、「嫁祝い」です。子供達は、夜に行われる「サイノカミ」で燃やすワラを集めるため、家々を唄を唄いながら回ります。

「サイノカミワクワク、銭も金も十万ガラリン、結構な十五日でおめでとう、祝いましょう、祝いましょう」

その際、前の年にお嫁さんをもらった家では、子供達がお嫁さんを囲んで子孫繁栄を願う唄を唄います。

「男まけ子まけ、大の男が十三人、ひとつ祝いましょ、もうひとつおまけに祝いましょ」

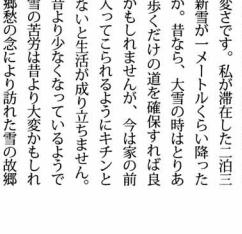
近年はこの集落にお嫁に来る人もあまりいなく、一般の方からお嫁さんを募集して嫁祝い事を観光行事的に行っていたようです。今年は幸運なことに集落内に久しぶりにお嫁さんがいらした家があり、本来の嫁祝いが行われました。そのため、見物人、報道陣も多く、この模様は翌日の新潟日報の一面にカラー写真で掲載されました。


新潟日報に掲載された写真

夜は「サイノカミ」です。

ここ西横山では「オーマラ」と言っています。今年は、村山上越市長も見物に来られていました。この行事は、大人の男たちの行事です。夜になると男たちは、村の神主さんの家の前の田んぼに集まります。男たちは、この場では基本的に「オーマラ、オーマラ」としか言いません。挨拶も返事も全て「オーマラ」。まずは、山から切り出した三本の神木（コマラ）に集めたワラをくくりつけます。その三本を組んで一本にして立ちあげます。その立ち上がったのが「オーマラ」です。ここから他のサイノカミと一風変わっています。男たちは、オガラという麻で作ったたいまつを持って、立ち上げたオーマラの周りを「オーマラ、オーマラ」と叫びながら走りまわります。そして火のついたたいまつでお互いの頭や背中をたたきあいます。なので、みんな合羽にヘルメットという重装備です。厄落としの意味があるので、厄年のへいや嫁をもらった人などはひときわ威勢よく「祝われる」ようです。男衆たちは子供の鬼ごっこのように嬉々としてたいまつを振り回し、たたき合います。ちょうど、この村に住んでいる私の同級生も参加しており、私を見つけ「オー、オーマラ、オーマラ（お前もやってみろ）」とたいまつを渡されました。私は振る舞い酒を飲んでいた勢いもあって、「オーマラ」と叫びながら飛び出し「獲物」を追いかけましたが、逆に後ろから「オーマラ」と一撃され、あえなく転倒。しかし、気分は壮快で良い厄払いをしてもらいました。

三十分ほどしてたいまつが無くなってくると、男たちは戦い（ウ）をやめ「オーマラ」にたいまつを投げ、火をつけます。火がオーマラに燃え移ると見物していた女衆や子供たちは習字やお札を燃やし、長い木の先にスルメや餅を結びつけて、オーマラの火で焼きます。これを食べると病気にならないということと聞きました。勇壮であり楽しげでもあり、降りしきる雪の中で振り回されるたいまつと燃え上がるオーマラの火は幻想的でもありました。


上越タイムスに掲載された写真

以上、久しぶりの小正月体験でしたが、昔から伝えられてきた多くのものが失われていく中で、地元の方の努力と熱意、それに子供たちの無垢な心によって、小正月行事が脈々と伝えられていることは、感動すら覚えました。

もうひとつ感じたことは雪の中での暮らしの大変さです。私が滞在した二泊三日の間で新雪が一メートルくらい降ったでしょうか。昔なら、大雪の時はとりあえず人が歩くだけの道を確保すれば良かったのかもしれませんが、今は家の前まで車が入ってこられるようにキチンと除雪をしないと生活が成り立ちません。雪の量は昔より少なくなっているようですが、除雪の苦労は昔より大変かもしれません。郷愁の念により訪れた雪の故郷でしたが、やはり故郷は「遠くにあって想うもの」であり、私にはあの雪の中での生活はもはや無理だと実感させられた小正月でもありました。